

「虹」におけるアーシユラとアナ

— D・H・ロレンス論 II

高 城 樞 秀

「虹」を読んだひとなら、アーシユラがこの小説の主人公であることを疑わないだろう。僕もその一人である。しかし、「虹」でもっとも精彩をはなつてゐる人物が、アーシユラでなく、彼女の母親のアナ・ブラグウィンであるという、僕の印象は、再三読み返しても変らない。成程、アーシユラは作者のモラルを体現している。彼女の思想も体験も、作者ロレンスのそれがなくては成立しえないものである。そして、アーシユラが登場してはじめて、「虹」の作品的意味が明瞭になつてくるといつても、けつして過言でないだろう。だが、人物が生き生きしている点にかけては、この小説のなかでアナに及ぶものはいない。このような僕の印象は、「虹」にた

いする僕自身の評価に決定的な力をもつてくるのである。

勿論、僕とても、「虹」がありがたりのリアリズムの小説だとはおもつていない。作者がこの作品にかけた新しい意図を知つてゐるつもりである。作者は、従来のリアリズムが後生大事にまもつてきた、性格という人間把握の方法をある程度無視してしまつてゐる。彼は、前作の「息子と恋人」で求めた、リアリズムとリリズムの美しい融合を「虹」で求めていない。前作におけるように、青春のほげしい情感の光のもとで、美しい場面を創造したり、人物を立廻りさせたりすることに、大して興味をいだいていなかったのだ。作者は別な方法で、この小説を書いていこうと決心したので。たとえば、一九一四年六月五日附の、「ガーネット宛の手紙」で、ロレンスは「虹」の小説的方法を次のように説明してい

る。「……人間のなかにある、非人間的なもの——それが、人間の要素よりも僕の関心をよびます。人間的な要素が、われわれに、一定の倫理体系のなかで出来上つた性格というものを与え、われわれを首尾一貫させてきました。……貴方は、僕の小説に、古くさい安定した自我をもとめないで下さい。そこには、個人がしらすしらすうちに、体験していく行動にしたがつている、別の自我があるのです。いわば、いままでの性格といつたものと同素異体のものといえましよう、……」

ロレンスが「虹」で試みた方法は、まったく新しい方法であつた。「虹」の出版された一九一五年前後ではまだ、一九世紀以来のリアリズムの小説が小説界を風靡していたのである。当時、ゴルズワージーは「フォーサイト家の人々」を熱心に執筆していた。彼の小説には、ブルジョワ階級にたいする作者の新時代的な批評眼があるが、描写の方法は昔ながらのリアリズムからあまりすすんでいない。また、新しい思想の予言者H・G・ウェルズは、そのころすでに科学小説を出版していた。そして、彼の人生小説の傑作である「トーン・パンゲイ」は、「虹」より六年前に出版されていた。だがこれもまた、「フォーサイト家の人々」と同じように、作者の思想や批評眼の新しさにもかかわらず、古い小説の方法のうえにたつて創作されている。本当のところは、そのころの読書界では、ハーディやベネットの小説が、一向にその生々しい感

動をうしなわれずに読まれていたのである。

僕は、「虹」の方法がたしかに新しくつたとおもふ。その証拠の一つとして、「息子と恋人」の価値を高くかつていたガーネットが、「虹」の原稿を読んだときの挿話などが挙げられるだらう。この旧派の批評家は期待はづれの戸惑いした気持になつて、落胆してしまつた。そして彼は、ロレンスが才能を浪費しているのではなからうかと、心配したぐらひである。しかしながら、ロレンス自身は、自己の小説の方法に自信をもつていた。そして彼の自信は、小説の方法にかぎつたことではなく、彼が人間の姿そのものにしたいてもつていた、認識にもわたるものである。彼は、人間のリアルな姿を、性格というような言葉で把握されえない、生命の混沌であると考へていた。一定の倫理体系のなかで、いかにも人間的に振舞つているような人間を、彼は到底信用することができず、また小説中に創造することもできなかつた。ロレンスは、人間が、意識下のなにかの力、つまり彼の言葉でいう「非人間的な要素」によつて生きているのだという、現代人に共通な人間認識を同時代の作家よりさきかけてもつていたのである。

さらに、彼の小説の方法には、彼の倫理的な裏附けもあると考へられるのだ。ロレンスは、自分のまわりのひとびとが、ブルジョワであれ、プチ・ブルジョワであれ、彼等の人間としての地位を失つていると考へた。というのは、彼は、

人間のこころの底にある、分析も掛引きも受けつけない、一種の無邪気さ、純真さこそが人間の威厳を保つものであると考えていたが、彼のまわりのひとびとがそれを知らずに生きていたからである。社会人にとつて大切なものは、いつの時代でもそうだが、社会的に価値のある、階級、身分、金、世評などである。勿論、それらのものは重要であり、最後から二番目の感情までいくかもしれない。しかし、人間を真に人間たらしめるものは、それらのものではなくて、人間の裸の魂なのだ——と、ロレンスは主張していたのであつた。

ところで、彼のいう無邪気さ、純真さとは何か。僕は、それが、そのまま「非人間的な要素」と同じだというつもりはない。だが、少くとも、こころの底の無邪気さは、個人の生命を超える全人類の生命を意識せずには、実感できない種類のものである。所謂「人間的」な感情には、社会的な体感があるが、無邪気さにはそれが無い。そこには、大いなる生命の宇宙的な混沌があり、流れがあり、無温度の発光があり、非情がある。

ロレンスの小説の方法は、実は、小説論的な意識のみならず、このように、彼の人間認識や倫理観の基礎のうえにたつていたのである。だから、僕が、はじめにのべたように、「虹」の人物が生きているとか、生きていないとかで、一概に作品を評価することは間違つているかもしれない。しかし、作者の創作意識と作品とは別ものである。いや、作者のモラ

ルも、思想も、体験も、それが小説に表現されたときには、作者を離れて作中人物の所有となる。僕は「虹」を、なによりもさきに小説「虹」として読んだ。そしてその結果、主人公のアーシユラよりも、母親のアナに親しみを感じたのであつた。

二

ステイーヴン・スペンダーが、ロレンスの小説中の人物について、次のように語っている。

「彼の描写は、作者自身の仮装人物と、彼の外部の世界にいる人物や、自然との間の、対話の形式で書かれている。その両者の関係には生命が通い、躍動している。ちようど物体から物体へ光がとぶようである。そしてロレンスは、その関係に、模倣のすばらしい能力、つまり他者を解剖したり裏返して分析したりしないで、他者をまねる力を賦与している。」(「創造的要素」一〇四頁)

僕はこの批評を一応正確だとおもつている。次作の「恋する女たち」や、「チャタレー夫人の恋人」などの人物は、大體においてこのような仕掛けで動いている。しかし「虹」では、この批評がそのまま適用しないのである。作中の主要な人物は、アーシユラにしても、アナにしてもその夫のウィリアムにしても、みな、なんらかの意味で作者の仮装人物であ

るからだ。そして彼等は、彼等だけの世界で恋愛し、結婚し、自我の争いをつづけている。この小説では、作者の仮装人物が対立者に話しかけるということは起りえないのである。作者は、もつと直接な方法で、作中人物の内心の世界を描いていく。簡単にその方法をいえば、作者自身が人物の内面や、無意識の力や、性心理を説明しているのである。

たとえば、アーシユラがアントンに初恋したとき、何故彼女が恋心を抱いたか、またどのように燃えていつたかを、作者の独特なスタイルで叙述している。「アントンが乞食のでない男」であり、「孤独な魂の持主」だから、アーシユラが愛するようになったというような書き方である。また、彼女の燃えさかる恋心を説明するにあつて、作者は、「アーシユラの情熱は、すでに生れていた。……彼という男性的なものにたいして、彼女は、自分を女性として限定することができ。あゝ、女性として、その極大限の自我になることによつて、かえつて彼女は瞬間の勝利を得るのだ」といつた調子である。

しかしながら、スペンダーのいう模倣の能力に関しては、「虹」の人物もそれを多分にもつている。もつともこれは、作者の分身と対立人物との間に対話がないのだから、もつばら自然とつながるわけである。普通、こうした、作中人物が自然の生命を模倣する方法を、象徴的なスタイルと呼んでいくようだ。人物の心理と自然とが、互に交感しあつていく方

法である。「虹」のなかでの有名な場景の一つであるが、アーシユラが恋人と、月光の輝く野原で踊る一節などが、そのよい例だろう。作者は、ここで満月を、主人公の女性を開かせるものとして描いている。

Her two breasts opened to make way for it, her body opened wide like a quivering anemone, a soft, dilated invitation touched by the moon.....

(二つの乳房が日光をもとめて開き、身体全体が、まるでアネモネの花のように、広く大きく開いていた。柔かい、胸の奥までもうちひろげた招きの姿勢……)

ところで、僕はなにを語ろうとしているのか。「虹」の作中人物の描写法と、僕が主人公のアーシユラよりもアナに親しみを感じていることと、一体どのような関係があるのだろうか。僕はいまここで、そのことについて語らねばならない。

小説中の人物が生きているか、死んでいるかということ、小説作品がまずあつてのちに、はじめて存在しうる批判である。作者の思想や、創作方法は、作品の創造されたのちでは、もはや作品の世界をこえて僕に話しかける権利をもちあわせていない。出来上つたものだけが芸術作品である。だから作中人物の生命は、作者のモラルや思想とは別の世界で、作者の仮装人物たちの、その仮装のなかにのみ躍動しているといえるのである。ロレンスが「虹」を書いたとき、アーシユラはアーシユラ以外のなにもであつてもならないの

だ。アーシュラの恋人も、母親のアナもそうであり、アナの養女のトムも母親のリディアも、アナの夫のウィリアムもそうである。しかし、この小説における作者の描写法は、さきにもいつたように、作者の直接的な説明に頼っていることを忘れてはならない。そこには、作中人物が、仮装人物としての自らの顔を破壊してしまふような、危機の生じる恐れがある。何故ならば、仮装人物に真に生命を通わすためには、あくまで彼等を仮装の美によつて動かしていなければならず、作者の素顔が出てきては拙いからである。だが「虹」のような説明的なスタイルでは、作者のモラルや思想が、小説中の人物の仮装を破つて浮かびあがり過ぎる確率が多い。実際のところ、僕は、主人公のアーシュラが、小説中の人物のもつこの約束にそいがたい体験をしているように、おもうものがある。アーシュラか、ロレンスカ、僕は、彼女の女性像に、その区別のつかない体験の散在していることを感じている。

僕にいわせれば、アーシュラはただの女ではなく、超人的な近代のアマゾン族の女である。愛情の体験にしてもそうだ。二十歳前後の彼女が、恋の燃えさかるさなかに、極大限の自我を認識するのはよいとしても、その果、彼女のしつた体験が——「極大限に到達した人間の魂が、そのことによつて無限感をうしなうことになる」という人生認識となるのは、若い女性の体験ではない。勿論、僕は、こうした体験が、年令や環境の如何を問はず、実感したものだけが実感で

きるものであることを承知している。だが、ここでは、僕は、作者の顔が主人公の顔と二重写しになつていて、それでアーシュラが超人的なアマゾン族の一人になつたのだと考えたい。その他にもまだいえることがある。彼女の愛情の体験は、普通の女性のそれと違つていて、男性的なものと女性的なものが混合している様子がある。これもまた、作者が、アーシュラをアーシュラとして生かそうとする作家の任務を踏みこえて、なにか性の思想に関する予言者的な、あるいは求道的な情熱を彼女に賦与したからであらう。

しかし、ここで断つておくが、僕は、アーシュラを怪物とも、くだらない女とも考えていない。むしろ魅力のある女性、美しい魂の女とおもつてるのである。彼女の初恋の夢にえがれた男性が、アントンのように自我の強い、孤高の精神の持主であつたことは、非常に美しい話だと感じている。鋭敏な知性、粗い布を身につけても身震いするような感性、恋の相手にたいして女としての自分をあくまで主張するところ、世間的な結婚に風俗の偽善をみつける若い女性の眼付き、ルーアンの寺院の建築美に不滅の存在を知る精神など、数えればきりがなが、彼女はたしかに美しい。しかも、僕は、小説「虹」のなかで、彼女が、人間の女の美しさや哀しさや静けさと次元を異にした性質をどこかにもつていて、奇異な女性像であるとおもつていて、いま僕は、人間の女と次元を異にする性質といつたが、この小説には、神秘体

も、怪物も、乱神もないのだ。だから、それは、作者ロレンスのなにかが、小説中の人物の仮装を破つて、作中にはみでてきたことから起つた現象であると僕はいいたい。

三

アーシュラにくらべて、アナはたしかに生き生きしている。アナには近代の女性の典型がある。孤独で、閉鎖的な愛情。その底に潜むエゴ・セントリックな支配慾。ナージンズム。アナは完全に近代人であるが、それと同時に近代を克服するなものをもつていない。アーシュラが、作者のモラルの可能性を表現する分身であるならば、アナは作者の現実の世界に住む仮装人物である。前者が、近代自我の限界をこすところに、生命の大いなる混沌をみたとすれば、後者は、近代人の強烈で、陰鬱で、暗く、血腥い自我に傷つき悩む人物である。作者は、このようなアナを描写するにあたつて、彼女と一定の距離を保っている。アーシュラでは、作者は、自己の精神の可能性を追求するあまりに、自分と彼女との二つの世界の境をこえてしまつたが、アナでは、始めから終りまで小説家の意識によつて冷静に書いているのである。

ここに、アナが小説中の人物としての生気をもつ理由がある。彼女には、仮装人物としての生き方があるのだ。アナの世界には、彼女ばかりでなく、夫のウイリアムという人物もいるが、彼もまた生きている人物である。彼等の夫婦生活

は、二人の愛情とセックスが織りなす暖い肉感的な月日の流れの底に、あくない自我の争いをつづけていく生活である。アナは夫よりもいくらか強いようだ。夫が怒れば涙をもつて抵抗し、夫が弱れば彼を愛情をもつて支配していく。寝台の秘密も彼女にとつては、自分の自我主張の場となるのである。夫に抱かれるときの恍惚。洪水のあとのように情感の去つたあとの、夫の空漠とした顔にたいする嫉妬と攻撃。それでいて彼女は夫が恐しいのである。自分の方へ近寄つてきたかとおもうと、自分にまつたく無関心になつてしまふ夫の男のところが、暗い冥府の風景のように感じられるのである。夫はなにを考えているのだろうか？夫は自分の仕事のことだけに熱中しているのではなからうか、我慢ならない、とアナはまたして憤るのである。

アナの精神の特徴の一つとして彼女のナージンズムが挙げられるだろう。彼女は自分が人間であり、女であるが故に、人間の男にたいして完全であると考えている。いや、自分自身にたいして完全であるとおもつているのかもしれない。彼女は、夫の未完成の生命が、自分の生命と交流しあうときに完成しうるのだ、と考えている。アナは、妊娠したとき、鏡のまえで、全裸になつて大きくなつた腹を揺さぶりながら踊り、生命の神に仕える巫女のように歓喜するのである。

アナは、このような女だからウイリアムがリンカーン寺院の美に感動してそこに自分の未完の暗い生が完成しているの

を得得したのも許し得なかつた。夫の生命は自分の女の性によつて完成する以外に、いかなる美によつても自己完成することができないと、彼女は信じていたからである。それで、アナは揶揄や嘲笑を使つて、夫の感興を殺いでしまうのである。

しかしながら、ロレンスの描写力は、このナルシスにもこのころの寂しさのくるのを見逃さずに追つていく。

「ときどき夫が、身動きもしないで、明るい空虚な顔をして坐つてゐるときなど、アナは、彼の明るい表情のさ中に潜む苦悩を読みとることができるような気がした。……なかに未成熟なあるものがあつて、それが彼を限定している。彼のうちには彼の力では到底開くことのできない暗黒があつた。……」〔本文一九七頁〕

これは、ヴィリアムについての説明的描写であるが、この文章をアナの心理の描写にも読めるはずだ。夫の心の暗い影は、彼女の力ではどうにもならない、物狂わしい生命である。彼女は、ナーシストだが、年をとるにつれて、自分の女の性の弱さをひしひしと感じているのである。そして自分が抑圧してしまつた夫のころのさなかに、彼の力でも、自分の力でも、開花させえないものを直観してゐるのである。

何故、アナは小説中の人物として成功したか。それはすでにのべたように、作者と作中人物との間に一定の距離があるからだ。では、何故、ロレンスが、アナを描写するにあつた

て、彼女と一定の距離を保てたか。僕はその答が唯一つしかないとおもつてゐる。アナが、作者と同じ現実の世界に住む近代人であり、アーシュラのように、近代自我を克服しようとする作者の意志を体現していないからである。僕の答に眞実性を与える傍証として、僕はアナの父母、つまり、ブラングウィン家の祖父母のトム夫婦の描写を挙げてよいとおもつてゐる。トムとリディアの場合、トムよりもリディアの方に、作中人物としての正確さがある。これは、作者がトムに近代以前の自我の姿を描き、リディアに近代人の自我の暗い影を幾分与えているからであらう。トムの男性像にはなんとなく神話的な匂いが漂つてゐる。この男は、ノティンガムの農夫で、妻を愛し、妻の連れ子のアナをも愛している。そして、リディアの情熱のかげにある、女の自我の暗い影をみて、古代人のように、女性的な未知なる偉大な力を感じて、静かに頭をたれてゐるのだ。それに較べて、妻の方は、ポーランド独立運動に敗れた夫と死別して、英国を放浪してゐるのである。彼女は、トムと違つてインテリであるために、はやくも近代人の孤独な自分のところを知つてゐる。夫に愛されながらも、理解されない、自分の女のころの冷い一隅を静かにまもつて暮してゐるのだ。誰がみても、トムよりリディアの方が生きてゐる。やはり、トム夫婦の場合にも、作者は自分の現実に近いリディアを巧みに描いてゐるといえるだらう。

ロレンスにとつて、トムは、近代以前の人間であるために異邦人である。そしてアーシユラは、作者の精神的冒険の途上にあつて、小説中の人物として立派に独り歩きできなかつたのである。

話をアナに戻せば、彼女はこの小説で精彩をはなつてゐるが、僕はまた一面、ロレンスが彼女を描写するときに、手慣れた人物を書く気安さがあつたような気がしないでもない。作者が、自分の描く人物について、はじめから、その姿が分つてゐるという、安心感である。前作の「息子と恋人」のモレル夫人や、クレアラにも、アナの前身がうかがえるし、またロレンスと妻フリーダとの結婚生活の体験からしても、アナ的人物は彼の熟知した人物である。もつともここで一言断つておきたいが、僕は、ロレンスがアナを書くときに、ある種の気安さをもつていたと推測しているが、それは、作者が人物を知つてゐるということ以外のなものでもない。彼が従来のリアリズムを墨守したとか、ありきたりの抒情に溺れたといふのではない。彼は、アナの精神の構図を弁えていて、人間把握の方法で新しい意欲をいだいていたのである。では、アナの描写法は、アーシユラで使われた説明的描写法と違ふだろうか。実は同じなのだ。少くとも、アナの心理描写は、アーシユラとほとんど同じような方法によつてゐる。だが、作者がその人物を熟知しているか、していないか、あるいは、人物に自己の現実的なものを仮装させるか、

自分がまだ充分に認識できない可能性を表現させるかで、人物描写の成功、不成功が決まるのではないだろうか。僕は、小説家がいかなる方法を意識して使おうと、それは、小説家個人の問題であつて、批評家や読者の美的感興をかならずしも呼ぶところのものではないとおもつてゐる。もつとはつきり僕の意見をのべておこう。問題の要点は、小説家の使つた方法が、ありきたりの方法であるときには、彼の描く人物は甚しく制限された人間になるだろう。勿論、それは当然のことである。しかし、小説中の人物の定着された美は、作家が彼等の人物を熟知して描くかどうにかかかつてゐるのである。「虹」において、僕は、アーシユラに作者ロレンス自身の精神の可能性をみるが、アナが他のすべての人物を抜いて、作者の自家籠中のものであるとおもつてゐる。

四

「虹」の小説的方法には前作の「息子と恋人」にないものがある。小説家としてのロレンスは、ポール・モレルを描いたときの関心を、アーシユラや、アナではもつてゐなかつた。だがまた、次作の「恋する女たち」の方法とも別な手法をもつて書いているのである。「息子と恋人」には、伝統的なリアリズムの小説を勉強した熱心な新人作家がいる。そして彼のリアリズムは、青春文学に欠くことのできない、水々しい情感と溶けあつて、ポールの恋愛や、絶望や、悲しみを

リリカルに写していくのである。「恋する女たち」では、スペンダーのいう対話がある。「作者の仮装人物と、作者の外部にいる人物や、自然との間の対話」によつて描かれていく。しかし、「虹」にはこれらのものはない。

この小説の手法は、さききのべたように、作中人物の心理にたいする説明的描写法と、象徴的手法である。前者のことはすでに語つたから、後者について書いてみよう。スペンダーは、ロレンスの象徴的手法を、「模倣」の能力、いいかえれば、「他者を解剖したり裏返して分析しないで、他者をまねる力」を、作者が作中人物に賦与する方法であるといつてゐる。この場合、僕は、スペンダーが「模倣」という言葉によつて、ロレンスの小説中の人物が他者、あるいは自然をまねる行為を通して、相手の生命を自分のところに実感することを意味しているのだと、解釈している。模倣がこの意味以外のことを意味している場合もある。あるひとが他者をまねる行為には、そこにコミカルな諷刺を含むことがある。しかし、スペンダーがロレンス文学について語るとき、彼のいう「模倣」とは交感、感応、一致の方向の意味であると、僕はおもつてゐる。といふのは、ロレンスのモラルが、個人の価値を、個人を超越する大いなる生命の非情な流れと交感することとにみているからである。個々人が、全人類的、宇宙的な生命を認識するためには、分析や解剖をすてて、その生命をまねて感応、一致しなければならぬのだ。

ロレンスの小説における、象徴的な手法は、このような模倣の能力であり、全人類的、宇宙的な、生命に近づこうとする人物を描く方法である。「虹」において、彼が説明的描写法で、人物を論理的に説明し切れなくなつたとき、彼はこの手法をもつて、主人公をはじめとする作中人物たちの、精神の可能性や意識下の生命の動きを書いていくのである。そしてこの手法は、アーシュラが、作者の精神の飛躍的な夢を体現している以上必然的に、アナよりもアーシュラの描写に多く使われている。月光の野原での抱擁や、アーシュラが馬の大群に囲まれ、奔走する馬に追われて必死の生命感を感じる場景や、野にたつ虹に人類の完成された生のシンボルを感じる瞬間などは、そのもつとも優れた例である。これらの文章には、所謂人間的な、社会的体感のある論理では説明しえない生命が脈動している。それは、象徴的手法以外では書けないものである。

虹のたつ場景である。——

And the rainbow stood on the earth. She knew that the sordid people who crept harb-scald and separate on the face of the world's corruption were living still, that the rainbow was arched in their blood and would quiver to life in their spirit, that they would cast off their horny covering of disintegration, that new, clean, naked bodies would issue to a new germination, to a new growth, rising to

the light and the wind and the clean rain of heaven.

She saw in the rainbow the earth's new architecture, the old, brittle corruption of houses and factories swept away, the world built up in a living fabric of Truth, fitting to the over-arching heaven.

〔虹が大地にかかつていた。彼女はいま、腐敗した地上を、固い殻をまとつて孤独に逼りまわつている人間どもが、まだ生きて居るのを知つた。いまや、虹は、彼等人間の血液のなかに橋をかけ、彼等の生命を鼓舞している。そして人々は、彼等を孤立させる角質の殻を脱ぎすてて、彼等の新しい、爽かな、裸の肉体が、新しい芽ばえ、新しい生長の方向へ、大空の風と光と清らかな雨のなかをたちどぼつていくのだ。彼女は、虹のさなかに、大地の新しい建築をみた。彼女は、古い、脆い、朽ちはてた家々や、工場が押し流されて、穹天にふさわしい、真理の生ける構造のうえに築かれていく世界をそこにみたのである。〕〔本文四六七頁〕

現在、僕は、ロレンスが孤独な作家であつたという定評に反対する気は毛頭ない。いやむしろ、僕にとつて、ロレンス文学の魅力は、そのモラルや思想よりも、彼が現代のヨーロッパ文明を否定した孤独さにあるのだ。彼は、自分と社会との間に、絶対にこえがたい溝のあることを、青春のころから意識していた。今日、ヨーロッパ文明は死に瀕し、ヨーロッパ人は自らの生命的欲求を充足させる社会をもつていない。彼等は社会の表面にあらわれた自分の顔ばかりを気にしてい

て、彼等相互の人間的なソリダリティが、個人のこのころの底にある全人類的生命によつて創造される眞実を知らないでいる。このような社会のなかにあつては、人間は偽善的になり、感傷的になる、と彼は考えていたのであつた。彼はまず、社会から自分を切り離して、孤独な世界にたてこもり、自分に必然なモラルをつくり出そうとしていたのである。そしてその孤独な彼が発見したモラルは、性を契機にして、人類の生命に個人が感応して、このころのうちに未完成のまま閉じこめられている、暗い生命を解放することである。では何故、個々人の暗い生命を解放するために、セックスが契機とならねばならないか。この問題に関しては、ロレンス個人の事情と、彼のまわりの人々が性をあまり罪悪視していた風俗とを、考える必要があるだろう。だが、いまはこの問題にふれないでおく、彼はなにも、セックスばかりを唯一の契機にしていたのではなかつた。「虹」のアーシュラや、ウィリアムが実感したように、大寺院の建築美をみる審美眼もその一つの契機になるのである。しかしともかく、彼にとつて性は大きなきつかけである。そして、ロレンスが追求したものは、両性の交渉を通して、このころの底の暗い生命を開花することであり、それを許容する社会であつたのだ。「虹」ではまだ、ロレンスの社会意識は生れていず、生命の解放にだけに作者は全力を注いでいる。「虹」のブラングウィン家の三代にわたる人々は、奇妙なほどに社会から孤立している。こ

れだけの長篇小説で、この小説ほど、社会の背景を無視して書かれた作品は他に例がないだろう。徹頭徹尾といつてよいぐらい、「虹」の人物は彼等の愛情と肉体の世界に没入しているのである。

ロレンスは、トム夫婦や、アナ夫婦や、アーシユラたちを、一度社会から切り離しておいて、愛欲生活のなかから、それによつて人間が人間として生きうる、もつとも根柢的な要素を彼等に追求させた。それは、繰り返してのべたように、生命主義的なモラルであり、混沌のなかにたつ無垢な魂であり、存在そのものの非情な姿の認識である。そして小説家ロレンスは、彼のモラルを「虹」において、アーシユラの精神の彷徨に体现させている。彼は、アーシユラが、暗く陰惨な近代自我の持主アナの子供である事実をまず設定して、うら若い彼女をして、近代自我の彼岸にある、人間性の根柢に潜む存在のあり方を探求させていくのである。ところで彼は、アナを創造するにあつて、彼女を性格だとか、一定の倫理体系に囚われた人間観をもつて描かずに、さらに意識下深くの生命によつて生きている女性を、見事に描写したのであつた。アーシユラにおいては、彼はアナを描いた方法にさらに加えて、象徴的手法をもつて、論理的説明の限界をこすものを把握しようとしたのである。

しかし、アーシユラは主人公であるが、アナほど生き生きしないのだ。彼女の顔には、作中人物の彼女の顔と、作者の

顔とが二重写しになつてゐる。もつとも象徴的手法を使ったところでは、彼女の女の生命が大自然の生命と融和して開花しているようである。だが、それでもなお、アーシユラが、近代のアマゾン族の一人にみえるのは、彼女が仮装人物の約束を破つて、作者と共存しているためである。ロレンスは、「虹」において、自分のモラルを確立して、それを描写するのに新しい小説的方法を発見した。それで彼は自信に満ちていたのであつたが、現在、僕が小説「虹」を読むとき、そこにまだ、未成熟な彼の才能を見ざるを得ないのである。「恋する女たち」に再登場する、アーシユラをまつて、僕は、ロレンスのモラルが小説的表現を獲得したことを認めるものである。これを逆にいえば、「虹」において、アナが主人公を凌いで精彩をはなつてゐる所以になるわけだ。一九一三年前後、つまり彼が「虹」を書いたころには、ロレンスは、アナにもつとも親しみを感じていた、惱める近代人の一人であつたのだ。彼は、人妻フリーダと恋をして、同棲し、彼女と激しい自我を争いをつづけていたのである。ロレンス夫妻は、互に愛しあい、互に暗い自我を怖れながらも惹かれていた。彼の詩のなかで、フリーダは次のように語る女とされてい

I am afraid of you, I am afraid, afraid, I

There is something in you destroys me—!

「あなたが恐いのです、恐ろしくてならぬのです、

あなたにはわたしを破壊する何かがあるのです

しかもフリーダは、ロレンスのつくる世界のみを、自分の生きていく世界だとおもつていた。そして彼女が、そのなかで、輝かしい日向に咲く花の欲びを味つていたのも、伝記作者オールドイントンなどが語つてゐる、ロレンス夫婦の生活の事実である。

重ねていうが、僕が、小説「虹」の人物のうちで、アーンユラを主人公と考えるのは当然のことであり、彼女の像に、自分のモラルの確立をもとめて飛躍せんとする作者の顔を見るのもまた、獨善でないとおもう。そして一方、アナのころに、作者の近代的自我の苦悩を読みとつても、不思議ではないはずだ。要するに、アーンユラの宿命は、アナの腹から生れて、母親の精神を克服することに賭けられていたからである。

覚書

(A) 僕の使用したテキストは Modern Library edition である。

僕がこの版を使つたのは、それが手許にあつたのと、この版が一般に広く読まれていて考えたからである。周知のように、「虹」は、一九一五年九月三十日に出版されて、同年十一月に卑猥の書として発禁された。モダン・ライブラリー版は、初版の Methuen 版と多少相違してゐるようである。たとえば、発禁当時、エロティック・シーンというので物議をかもした箇所などがさうである。アーンユラとアントン・スクレベンスキーとの愛恋の場面に

おいて、初版本が—

……She yield to him, and he pressed himself upon her in extremity, his soul groaning over and over: "Let me come—let me come." となつてゐるが、モダン・ライブラリーの方では—

……She yield to him, and he pressed himself upon her in extremity, his soul groaning over and over.(P. 308)とある。しかし、この程度の改訂は、「虹」の思想やスタイルにはほとんど影響を与えてゐないと、僕はおもつてゐる。

(B) 僕はこの批評のなかで、S・スペンダーの「創造的要素」から引用したが、その書の原題は—

Stephen Spender: *The Creative Element, A Study of Vision, Despair and Orthodoxy among some Modern Writers*, London, Hamish Hamilton, Ltd., 1955. 以下、ロレンスは、第五章の *Pioneering the Instinctive Life* (P.P. 92—107) で論じられてゐる。断つておくが、僕はスペンダーのロレンス論をそれほど高く評価してゐない。ロレンスより十年若い詩人の批評として興味をもつてゐるにすぎない。たまたま、ロレンスの小説中の人物について、洞察に豊んだ言葉を書いてゐるのをみたら、引用したのである。なお「創造的要素」は、「破壊的要素」(一九三五年)と併せて読むべきである。

(C) D・H・ロレンスの研究書として、次のものを僕は高く評価してゐる。

Harry T. Moore: *The Life and Works of D. H. Lawrence*,

London, George Allen & Unwin Ltd., 1951.

中橋一夫著「ロレンス」新英米文学評伝叢書 研究社 昭和三十一年七月十日。

ハリ・T・ムアは、ロレンスの小説、特に「虹」の象徴的なスタイルについて、その情緒的、音楽的な文章が、フランス象徴詩派から発した近代シンボリズムの流れを受けるものであると考えている。そして、作者はこのスタイルによつて、意識下の諸々の衝動と心理との關係を、巧みに表現している、といつてゐる。「虹」は、その後半において、伝統的な小説の主流から離れて、詩人の遺産を吸収している。つまり、この小説の表現は、平面的叙述や劇的な論理によるよりは、多分音楽的、情緒的である。〔一四〇頁〕

ムアのこの批評は、スペンダーのそれと、根本的な点で一致してゐる。

④ Kenneth Young: *D. H. Lawrence*, London, Longmans, 1952. Pp. 59. は The British Council のために出版された、ペンフレットであるが、要領よく書かれてゐるうえに、この叢書の色である詳しい書誌がついていて便利である。「虹」のスタイルに関しては、ムアや、スペンダーなどと共通の意見をもつてゐる。〔同書二二一―二四頁参照〕

⑤ オールマンマンの伝記は、Richard Aldington: *D. H. Lawrence Portrait of A Genius, But……*, London Heinmann, 1950, である。現在、ロレンス伝記としてあつても詳しく、話の面白く批判も温健である。翻訳もてゐる。

(本学助教)

学講師 唐木順三著

中世の文學

B 6 版 上製函入
三一五頁 価 三五〇円

中世文學の展開

- 一、すき
- 二、すきび
- 三、さび

鴨長明

- 一、古京はすでにあれて新都はいまだならず
- 二、最初の歌集
- 三、イロニイ
- 四、出離
- 五、方丈の榮華
- 六、発心

兼好

- 一、すきび
- 二、つれづれ

世阿弥

- 一、休元

芭蕉への道

× × ×

前著「詩とデカダンス」において日本の古典に関心をよせ、芭蕉及び芭蕉以後を対象とした著者は、ここでは溯つて芭蕉へ至る道を究めようとしてゐる。「我々の生きてゐる現代がいにはば様式喪失の時代であるのは反対に、中世が確固とした様式を成立せしめた時代であつた。」といふ点に筆者の関心の一つの理由がある。本年度の問題作といふべきであらう。(K)

× × ×

筑摩書房